第２章 死体の価値

THE VALUE OF A DEAD BODY

01 — 落ちない雨

ロイが最初に気づいたのは、静けさだった。

二十メートルほど後方では、今も雨が舗装面を叩いている。高架道路の向こうでは車が走り、都市はいつものように商業活動と監視を続けていた。

しかし、ロイの正面だけは雨が止まっていた。数百もの雨粒が、建物の間に浮かんだまま動かない。無数のネオンの光点が、空中に静止しているようだった。

ロイが手を伸ばす。

「触らないで」

通信端末からレイチェルの声がした。

「何が起きている？」

「わからない。水に含まれている物質では、あの現象を説明できない」

「光学投影か？」

「影は本物よ」

一粒の雨が、落下する代わりに空へ昇って消えた。視覚系の記録位置と運動予測が一致していない。

通りから子供の声がした。

「理解しようとしているんだね」

クロノス。姿は見えない。

「理解することは、たいてい役に立つ」とロイは答えた。

「今回は役に立たないよ」

その瞬間、浮いていた雨粒が一斉に落ちた。ただ落ち始めたのではない。舗装面を砕くほどの勢いで衝突し、ガラス片が通りへ飛び散った。

ロイは後退して顔をかばった。もう一度見たとき、異常な空間は消えていた。

「ロイ、東へ六十メートル。保守用の入口がある」

「子供は？」

「今は忘れて」

「子供じゃない」

「ええ。私も、そう思う」

頭上では三機の監視ドローンが進路を変えた。追跡が再開された。

02 — 記録に残せない命令

MBU-09 の移動司令室で、ベクターは計測データを調べていた。

光学装置と環境センサーは、同じ雨粒を異なる位置に記録している。共通の時刻基準に同期しているはずの装置が、異なる継続時間を表示していた。

EVENT DURATION: 1.42 SECONDS
EVENT DURATION: 0.09 SECONDS

「また測定系に干渉したな」

クロノスは小さな椅子に座っていた。「電源を切れば？」

「それでは何も見えなくなる」

「なら、困ったね」

シェイドが入室した。「バッティは旧工業区画へ向かっている。地下を全部押さえることはできないわ」

ベクターは都市地図を拡大した。政府の現行データベースに存在しない旧水道トンネルがいくつもあった。

ヌルが、ゴライアスとの四秒間の戦闘記録を表示した。

「通常の動力残量は正常。でも NIL-11 には不可逆的な変化がある。最大出力を繰り返させれば弱らせられる可能性があるわ」

秘匿通信が起動し、新しい指示が表示された。

RECOVERY CONDITION: ANY

PRESERVE SPECIFIED COMPONENTS

NO PUBLIC RECORD

ベクターは最後の行を見つめた。公的記録なし。

クロノスが椅子から降りた。「大臣が欲しいのは囚人じゃない。中を開けられるものだよ」

03 — 決して外さない狙撃手

ロイが工業区画の端へ到達したとき、最初の弾丸が飛来した。

銃声より先に、すぐ横のコンクリート柱が砕けた。弾丸は、一瞬前まで頭部があった場所を通過している。

ロイは保守車両の陰へ身を落とした。

BALLISTIC THREAT DETECTED

ORIGIN: UNRESOLVED

二発目は車両を貫き、三発目は直前まで彼がいた座席を破壊した。

三発とも、回避しなければロイが存在していたはずの位置に命中している。

敵は動きを予測していた。

ロイは廃止された浄水設備へ走る。弾丸が入口の標識を破壊した。彼が急に進路を変えると、次の弾丸は元の進路の先へ着弾した。

弱点はそこにある。

狙撃手は、すでに下された判断を予測できる。だが、発射後に変更された判断までは予測できない。

ロイは突然立ち止まり、弾丸をやり過ごした。次は前進せず後退し、さらに横へ動いて崩れた手すりの反動で出入口へ飛び込んだ。

二秒間、射撃が止まった。

遠方でベクターは銃を下ろした。

「予測周期を見抜いた」

通信からシェイドが答える。「なら予測をやめればいい」

「命中精度が下がる」

「撃ち殺す必要はないわ。走らせ続ければいい」

04 — そこにいない女

廃止された浄水施設には、錆と停滞した水、古い消毒薬の臭いが残っていた。

巨大なろ過筒と壊れた搬送設備の間をロイは進む。非常灯には電源が来ていなかった。

赤外線視覚を使用したが、熱源は検出されない。

肩に何かが触れた。細い切断フィラメントだった。外套の袖が裂けた。

振り返る。誰もいない。

二本目が首の後ろに触れた。締まる前に、ロイは指でつかんだ。線が震え、背景へ溶けていた女の腕と顔が一瞬だけ現れる。

シェイド。

彼女はフィラメントを捨てて姿を消した。

「速いわね」

声は左、次に右、そして背後から聞こえた。

ロイは音ではなく、床の水たまりを見た。風もないのに水面が揺れる。

刃が喉元をかすめた。彼は手首をつかむ。迷彩が途切れ、暗い瞳と顎の白い傷跡が見えた。

次の瞬間、女は武器を手放し、再び消えた。

水たまりに足跡が一つ現れる。続いてもう一つ。

「姿は消せる。だが、重さは残る」

防御するたび、ロイは加速を強いられた。

NIL-11: STRESS ACCUMULATION

RECOMMENDED ACTION: REDUCE HIGH-OUTPUT MOTION

ロイは罠を理解した。シェイドは彼を殺そうとしていない。戦わせようとしているのだ。

05 — 別の種類の強さ

ロイは動きを止めた。水面の揺れが二方向から近づく。

一方は投影。もう一方が本体だ。

天井には古い配管が走り、腐食した継ぎ目に結露がたまっていた。機械式圧力計は、上部の配水系統にまだ水が残っていることを示している。

ロイは手動開放弁へ手を伸ばした。

フィラメントが右手首に巻きついた。力で引き裂けば、また高出力が必要になる。

彼は逆に、引かれる力を利用して弁へ近づいた。左手でハンドルを回す。

配管が破裂した。

天井から大量の水が噴き出し、シェイドの戦闘服の輪郭を描く。光学迷彩が無数の歪みへ分解された。

ロイは彼女の進路を塞ぎ、外部制御装置を打った。迷彩が完全に停止する。

シェイドは支柱へ背中を打ちつけ、武器を落とした。

「殺せたはずよ」

「そうだ」

「なぜ殺さなかった？」

「お前も俺を殺そうとはしていなかった」

彼女は天井の監視カメラを見た。

「命令が変わったのよ。必要なのはあなたの頭だけ。それと、それを生かしておく装置」

ロイは黙った。

シェイドの表情に初めて、彼女自身を送り込んだ組織への恐怖が見えた。

直後、彼女が叫んだ。

「伏せて！」

ロイは彼女を柱の陰へ引き込んだ。二人の間を、ベクターの弾丸が通過した。

06 — 完璧な一発の代償

弾丸はろ過筒を破壊した。蒸気と残留物が室内を覆う。

ロイはシェイドを放した。彼女は瓦礫の中へ姿を消す。

肩には破断した金属片が刺さっていた。彼は引き抜いた。

STRUCTURAL DAMAGE: MINOR

POWER RESERVE: 84%

NIL-11: DEGRADATION PROGRESSING

問題は動力残量ではない。再充電も修復もできる。しかし NIL-11 の損耗だけは残り続ける。

「ロイ」

保守用スピーカーからレイチェルの声が戻った。

「東のサービストンネルが開いている。接続部が封鎖されるまで、およそ四十秒」

「敵は見えているのか？」

「直接は見えない。水圧で検出しているの」

「水圧？」

「重いものが動けば、古い支持構造の圧力分布も変わる。顔は見えなくても、人が環境に与える影響はわかるわ」

ロイはトンネルを見た。

「出口で誰かが待っている」

「ええ」

「誰だ？」

「わからない」

移動司令室では、ベクターが新しい評価を見ていた。ロイは攻撃されるたびに戦い方を変えている。

「クロノス。お前が必要になるかもしれない」

「まだだよ」

「なぜ？」

「彼はまだ、世界が誰にとっても同じように動くと思っているから」

07 — 閉ざされた門

ロイはトンネルへ入った。年代の異なる配管が壁に並び、通路の奥に半開きの非常扉が見える。

「そこを抜けて。主排水路につながっている」

レイチェルの声に従って近づくと、扉が突然閉まった。電子錠が一斉に作動する。

ACCESS DENIED

「私の命令じゃない」

背後の闇からヌルが現れた。灰色の防護服は戦闘装甲というより医療装置に近い。

「ロイ・バッティ」

「また一人か」

「私は戦う必要がない」

ヌルは導電接点の並ぶ小型装置を構えた。

EXTERNAL INTERFERENCE SOURCE DETECTED
NEURAL CONTROL RISK: ELEVATED

装置からパルスが走る。照明が明滅し、人工筋肉と神経指令の同期が乱れた。右手が意図せず閉じ、左脚が一瞬反応しなくなる。

「交換できない部分を探しているの」とヌルは言った。

再びパルス。視界の周囲が暗くなった。

NIL-11 REGULATION: UNSTABLE
FAILURE RISK: INCREASING

「あなたの身体は強力よ。でも、自分自身の限界から自由なわけじゃない」

ロイは扉の脇にある古い配管を見た。

「その通りだ。だが、お前も自由じゃない」

彼は腐食した支持金具を打った。配管が破裂し、高圧の水流がヌルの装置を直撃する。

ヌルがかばう間に、ロイは落ちた金具を使って機械式非常開放装置を操作した。施錠機構が破断する。

扉を押し広げて抜けたとき、その足が初めてもつれた。

08 — 生き延びるための代償

レイチェルは緊急回線で届く NIL-11 の不完全な計測情報を見ていた。

兆候は明白だった。生命維持制御が不安定になっている。

「交換ユニットの準備ができました」

研究員が報告する。

医療区画の滅菌容器には、銀色の NIL-11R が置かれていた。政府が管理する特殊ヘリウムに依存しない、代替作動媒体を用いた装置だ。

予測最大出力は、元の七十パーセント。

「適合性は？」

「モデル上は許容範囲内です。ただし稼働中の NEXUSYS-11 で実施した例はありません」

「確実ではないのね」

「はい」

「それでも準備して」

研究員はためらった。

「交換によって、旧式の記憶インターフェースが露出する可能性があります」

レイチェルが顔を上げる。

「内部インターフェース？」

「さらに下層の古い構造です」

彼女は意味を理解していた。現在の身体には、最新世代だけでは説明できない、意図的に隔離された構造が残されている。

「完全診断を行えば、再始動以前の記録を発見するかもしれません」

「その記録にはアクセスしないで」

「システムが認証を要求しても？」

「特に、その場合は」

09 — 最後の扉

ロイは最後の排水接続部へ到達した。前方は巨大な地下水路へ下っている。

「青い保守灯を追って。私の施設につながっている」

レイチェルの声がした。

「準備していたんだな」

「可能性に備えていたの」

「何の可能性だ？」

「誰かが、あなたの正体を突き止めること」

ロイは止まった。

「俺の正体を知っているのか？」

返答の代わりに青い灯りが一つずつ点灯する。

広い水路の橋を渡りかけたとき、背後の灯りが赤へ変わった。ヌルが入口に立っていた。

「装備を壊してくれたわね」

「扉を閉めたのはお前だ」

「命令を受けていた」

「昔、俺もそうだった」

ヌルは第二の干渉装置を起動した。ロイの視界が明滅する。

NIL-11 REGULATION: CRITICAL

彼は片膝をついた。

「ロイ、戦わないで」とレイチェルが言う。

「選択肢が少ない」

「あるわ」

橋の下で巨大な水門が開いた。上昇する水がヌルの進路を遮り、非常隔壁が降下する。ロイのいる通路だけが隔離された。

側面の扉が開き、その奥に小型エレベーターが見えた。

「中へ入って」

ロイは重くなった脚を動かした。

隔壁の向こうでヌルは追わず、通信を送った。

「対象は民間施設へ侵入」

「誰の施設だ？」とベクター。

ヌルは識別情報を読む。

「レイチェル」

10 — 七十パーセント

エレベーターは一分近く下降した。ロイは壁にもたれていた。

POWER RESERVE: 76%

NIL-11: REGULATION FAILURE IMMINENT

扉の向こうに、柔らかな白い光の医療室が現れた。

レイチェルが手術台の横に立っている。記憶にある姿と、ほとんど変わらなかった。

「予想より悪い状態ね」

「大変な夜だった」

彼女はロイを手術台へ案内した。だが、無理に横たえようとはしない。

彼は滅菌容器の銀色の装置を見た。

「NIL-11R か？」

「ええ」

「七十パーセント」

「そう」

「俺は同じままでいられるか？」

「最大出力は下がるし、内部制御も変わる。すべて同じ感覚で動けるとは約束できない」

「そういう意味じゃない」

「わかっている」

ロイは手術装置を見た。

「記憶はどうなる？」

「保持されるはずよ」

「はず？」

「この処置は初めてだから」

彼はレイチェルを見つめた。

「まだ隠していることがあるな」

「あるわ」

「失われた十一年間について？」

「ええ」

「話す気はあるのか？」

「あなたが、それを聞ける状態になったら」

ロイは考え、銀色のユニットを見た。

「命は助かるのか？」

「今の機能停止を防げる可能性はある。でも不死身にはならない」

「それでいい」

「それでいい？」

「不死の約束なら、もう十分に聞いてきた」

彼は手術台に横たわった。

「やってくれ」

レイチェルは動かなかった。

「あなたの承認が必要よ」

「承認する」

その言葉を聞いて初めて、彼女は手術システムを起動した。

一方、都市の別の場所でクロノスが水処理施設の映像を見ていた。

「レイチェルが確保した」とベクターが言う。

「なら施設を攻撃する」

「まだ」とクロノス。

「なぜ？」

「彼女が何を隠しているのか、知りたいから」

地下深くで、旧型 NIL-11 の接続が切り離されていく。

ロイの視界が暗くなった。

その一瞬、知らない記憶が現れた。

白い部屋。閉じた扉。そして子供の声。

「僕のこと、覚えている？」

すべてが暗闇に変わった。

第２章「死体の価値」— 完